

第4章 近代和歌山の発展



小川琢治と和歌山

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

生い立ちと経歴

田辺市出身の小川琢治(1870～1941)は、京都帝国大学教授として、日本の地理学や地質学の発展に大きく貢献した偉大な学者です。日本で最初にノーベル賞を受賞した、物理学の湯川秀樹(1907～1981)の実父でもあります。

琢治は、田辺藩の藩学校で漢学を教えていた浅井篤(1826～1896)の次男として生まれました。和歌山中学校で学んだ後、上京して1887(明治20)年に第一高等中学校に入りました。博物学者の南方熊楠(1867～1941)は、和歌山中学校の四年先輩にあたります。浅井家の家計が苦しかったため、琢治は1891年に元紀州藩士の小川駒橘(1844～1922)の養子になって勉学を続けました。養父の駒橘も、長屋家から養子入りして小川家を継いだ人物で、初代の和歌山市長となった長屋喜弥太(1838～1897)は実兄にあたります。小川家の先祖代々の墓地は、和歌山市堀止西二丁目の万性寺にあります。



小川琢治

琢治は、大学に入る前は哲学や文学を勉強し、『金色夜叉』で有名な尾崎紅葉(1868～1903)とも知り合いでした。やがて琢治は、自然科学に関心を持つようになります。小川家の養子となった頃に、琢治は勉強の疲れから不眠症になり、治療のため故郷紀州の熊野地方を旅行することになりました。ところが出発のまぎわに大地震が起こり、途中の愛知県や岐阜県が大被害を受けました。琢治は自然の脅威や震災の悲惨さに心を痛めながら紀州に戻り、熊野では逆に大自然の雄大さや人々の独特な暮らし方に心を打たれました。この旅行経験が小川琢治を、地球の様々な現象を研究する地理学や地質学へと導いたのでした。

琢治は1893年に帝国大学(東京大学)理科大学地質学科に入学し、教授の小藤文次郎(1856～1935)や横山又次郎(1860～1942)らの教えを受けました。1896年に大学を卒業し、大学院を経て翌年には農商務省の地質調査所に入所します。そこで、日本や中国の地質調査にでかけ、また『地学雑誌』の編集を通じて地理学の発展に大きく貢献しました。1900年から翌年にかけてヨーロッパに出張し、フランスやオーストリアの学者と交流をもちました。1908年には、京都帝国大学文科大学に教授として招かれ、日本で最初に創設された地理学の講座を担当しました。翌年に理学博士となり、1921(大正10)年には京都帝国大学理学部に新設された地質学の講座に移ります。琢治は地球学団を組織し、雑誌『地球』を創刊して地理学や地質学を含めた広い意味での地球科学の発展に力を尽くしました。理学部長を務めていた

\*1 第2編 第4章「南方熊楠と紀南地方」168ページ参照。

1926年には帝国学士院の会員になりました。同じ年に3男の秀樹が理学部物理学科に入学しています。琢治は1930（昭和5）年に大学を退官した後も精力的に研究を続けましたが、秀樹がノーベル賞を受賞する8年前の1941年に、急な心臓発作のため亡くなりました。

## 小川琢治の学問的業績

小川琢治は南方熊楠と並んで、自然科学と人文科学の両方に通じた「学問の巨人」でした。琢治は地質学者として、日本列島の地質構造の研究に成果をあげ、中国の撫順炭鉱などの天然資源開発にも大きな役割を果たしました。また、1923年の関東大地震が地殻の深部で生じたとする学説を提唱し、地震学の発展にも貢献しました。地理学者としては、人文地理学と自然地理学にまたがる幅広い分野で先駆的な業績を残し、また大分県の臼杵石仏の学術的価値を最初に発見するなど、大きな足跡を残しています。主な著書として、『地質現象の新解釈』、『台湾諸島誌』、『支那歴史地理研究』、『人文地理学研究』、『戦争地理学研究』、『日本群島』、『数理地理学』などがあります。

## 琢治の妻と子どもたち

小川琢治は1894年に、養父駒橋の長女 小雪（1875～1943）と結婚しました。当時、琢治はまだ大学生であり、5つ年下の小雪とは今でいう「学生結婚」でした。小川夫妻は、5男2女の子に恵まれました。妻の小雪は多忙な夫の学者生活を支え、7人の子どもたちを立派に育て上げました。湯川家に養子入りした3男の秀樹は、「二人の父」というエッセイのなかで、「母は七人の子どもの一人一人に、本当に公平に、そして惜しみなく愛情を注いだ」と記しています。石原家に養子入りした5男の滋樹（1913～1945）は第二次世界大戦で亡くなりましたが、残る4人の息子たちはいずれも一流の学者になりました。長男の芳樹（1902～1959）は金属工学を専攻し、東京大学教授になりました。貝塚家に養子入りした次男の茂樹（1904～1987）は中国古代史を、4男の環樹（1910～1993）は中国文学を専攻し、父の琢

治や秀樹と同じく京都大学教授になっています。

湯川秀樹は、先に触れた「二人の父」のなかで、紀州への想いを印象深く綴っています。

「養家も実家もともに、故郷が紀州にあるのは不思議な因縁である。暖かな日の光を浴びた南の国の山々では、蜜柑がおいおい色づいてきたことであろう。ちょうど父母の暖かな恵みを受けて子供が育っていくように」

湯川秀樹の養父となった湯川玄洋（1866～1935）は、小川琢治と同じ紀州出身の医者でした。玄洋は大阪で湯川胃腸病院を開業し、胃潰瘍で入院した文豪夏目漱石（1867～1916）を治療したことで知られています。小川琢治・湯川秀樹父子の偉大な学問的業績は、ともに紀州への深い愛情を基盤として育まれたものだったのです。



湯川秀樹

提供：京都大学基礎物理学研究所  
湯川記念館史料室